

狂詩短冊二葉

—東久世通禧と猪熊信男の戯れ書きを読み解く—

内 田 誠 一

キーワード

狂詩短冊、東久世通禧、猪熊信男、古帆軒、コンパンヤ

要 旨

狂詩とは、滑稽を主とする、日本化された狂体の漢詩のことである。狂詩が隆盛を誇り始めるのは江戸中期以降のこと。江戸の寝惚先生（蜀山人）や京都の銅脈山人・中島棕隠などが有名である。明治になると成島柳北が狂歌に加え狂詩も作って大家と目された。しかし、狂詩は大正時代ごろから衰退し、昭和以後は殆ど作られることが無くなった。

短冊に書かれる文学のスタイルとしては和歌が最も多い。よって、作られた時代も限られ作品数も少ない狂詩が書かれた短冊は、最も稀少な部類に属する。本稿では「狂詩短冊」の作例として二葉をとりあげて分析する。一葉は公家出身の政治家・東久世通禧の短冊、もう一葉は宮内庁図書寮御用掛で宸翰研究家の猪熊信男の短冊である。狂詩が書かれた短冊の内容を分析し、あわせてその筆者の和歌短冊の書きぶりとの違いについても比較を試みたい。

一、はじめに

短冊と言えば和歌短冊が最も多く、ついで俳句、その次に漢詩や狂歌。では、狂詩短冊はというと、短冊の世界で最も稀少な部類に入るであろう。筆者はこれまでに数万枚の短冊を実見してきているが、その中で目にした狂詩短冊は僅か数枚であった。現在、狂詩は狂歌とともに全く振るわず、狂詩というジャンルすら知る人は極めて少ない。我が帖中にある狂歌短冊は四葉のみ。手前味噌ながら、まさに「珍短」中の珍短。狂詩短冊について書かれた論考は勿論、雑文さえ管見の及ぶ限り見当たらないのも当然であろう。

さて本稿ではその中から、歴史に名を残す人物の短冊で、かつ真筆と断じ得る二葉を取り上げたい（注1）。一葉は公家出身の政治家・東久世通禧の短冊、もう一葉は宮内庁図書寮御用掛で宸翰研究家の猪熊信男の短冊である。狂詩が書かれた短冊の内容を分析し、あわせてその筆者の和歌短冊の書きぶりとの違いについても比較を

試みたい。

二、狂詩とは

狂詩とは、滑稽を主とする、日本化された狂体の漢詩のこと。平安時代にすでに滑稽な漢詩が作られたが、別集としては、室町時代の高僧・一休の『狂雲集』が挙げられよう。集中には飲酒や女犯を詠ずる詩が見え、広義の狂詩とも見なせよう。隆盛を誇り始めるのは江戸中期以降である。江戸で寝惚先生（蜀山人）が狂詩や狂文を作って『寝惚先生文集』を上梓。一方、京都に銅脈山人が出て『太平楽府』を江湖に問うた。同じ京都の中島棕隠の狂詩も有名である。平仄を守っている作者もいるが、時には平仄も整わない作品を作る者もいた。明治になると、成島柳北が狂歌に加え狂詩も作って大家と目された。その後は『古今狂詩大全』の編者である三木愛花や、風刺雑誌「团团珍聞」の狂詩の評を担当した真木痴囊などが出たが、大正時代ごろから衰退し、昭和以後は殆ど作られることが無くなった。

次に狂詩の作例として、銅脈山人「伊勢道中 其三」をあげよう。参考までに平仄（平字は○、仄字は●、韻字は◎とする）を付す。銅脈は讃岐出身とされるが、試みに江戸言葉で訳した。

○●○○●●

鈴鹿多雲助

鈴鹿 雲助多く

（鈴鹿峠には無頼の雲助の連中が多くて始末に

負えねえ）

○●○○●●◎

山中博奕催

山中 博奕催す

（やつらときたら、山の中でしょっちゅう博打
三昧）

○●○○●●

終負当焼火

終に負けて焼火に当り

（負けが込んで終いに着物まで賭けてすかんぴ
ん、震えながら焚火に当たってやがる）

●●○○◎

散作護摩灰

散じて護摩の灰と作る

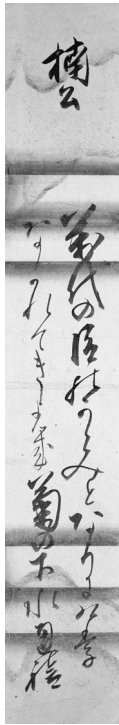
（あれ、もういねえや、今ごろ枕さがしでもし
てるんじゃないか）

博打に負け、身ぐるみ剥がれて下帯一つになった雲助。金を稼ぐために、旅人の懐中や枕元の金を狙いに行くというお決まりの姿を詠じた作品。社会の最下層の者たちの卑俗な生態を活写している。もしこの詩を中国人が見たら理解できないであろう。「鈴鹿」は地名だと言えは納得しようが、「雲助（もぐりの宿場人足でばったく）りを行なっていた無頼の者」や「護摩灰（旅人から金品をまさあげる者）」はまったく通じないからである。

三、東久世通禧の短冊―通禧の軒号「古帆軒」の由来を
示唆する遺作

東久世^{ひがしくぜ}通禧^{とんき}（一八三四―一九一二）は、文久三年の政変で京都を追われて長州に下った（世に言う「七卿落ち」）尊攘派公家七人（三条実美、三条西季知、四条隆謨、東久世通禧、壬生基修、錦小路頼徳、澤宣嘉）のうちの一人である。東久世の名は「みちとみ」であるが、時に有職読みして「ツウキ」と呼ばれることもある。号は竹亭・古帆軒。七人のうち、通禧は最も長命で七十八まで生きた。「七草は残り少なくなりけり 心して吹け 野辺の秋風」は、そのむかし共に長州に下った仲間が、次々と世を去っていく晩年の寂しい思いを詠じた名歌として知られる。能筆な上に、貴族院や枢密院の副議長にもなったので、多分から詩や歌の揮毫を頼まれたようで、夥しい数の書法作品が伝世する。巷間によく現れる和歌短冊の例として、まず一葉掲げたい。「楠公」と題した詠史短冊（図1）

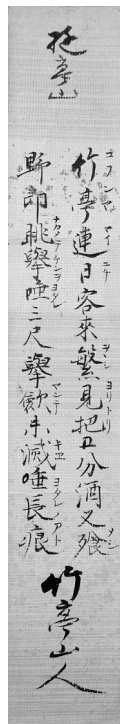
図1 東久世通禧和歌短冊「楠公」



万代の臣のか、みとなりけり なかれてきよき菊の下水
通禧

内曇短冊に銀霞が六段引かれた上質の短冊。墨継ぎは第一、第三、第五句で行われ、署名は半字下り、全て定法通りに謹厳に認められている。これが通禧の一般的な短冊書法である。さて、通禧の作品群の中で特に異色なのが、「遊亭山」と題された次に挙げる狂詩短冊（図2）である。

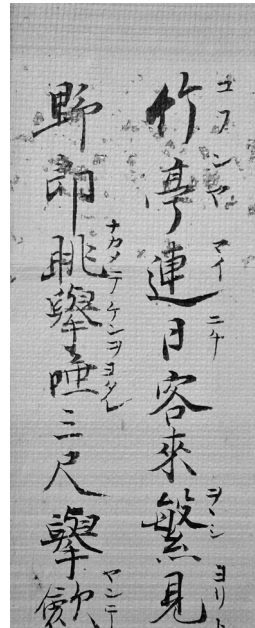
図2 東久世通禧狂詩短冊「遊亭山」



コランマイニチ
竹亭連日客来繁見把五分酒又残
ナカタケケラヨク
野郎眺 挙 唾三尺拳 飲未減唾長痕 竹亭山人

図1に掲げた和歌短冊とは全く風情が異なるのは一目瞭然である。和歌と狂詩という文学上のスタイルが異なっているため、和様と唐様をそれぞれ用いて書していることもある。ただそれだけではあるまい。狂詩はあくまで狂体の詩であるので、どこことなく遊びの気分が漂っている。詩題の第一字の「遊」の字の最終画をかなり右に伸ばしたところや、署名の第四字「人」を左右にのびやかに払ったところなどにそれがよくあらわれている。勿論、知識人の真面目な遊びであるが、「戯れ書き」と言ってもよいと思われる。ルビ（図3）を細かく書き入れている時の通禧の気分はどのようなものであったか。

図3 図2の短冊に書入れられたルビ（部分拡大）



さて、次に詩の内容を分析したい。「遊亭山（亭山に遊ぶ）」と題した狂歌。「亭山」とは亭のある築山の意であろう。これは、竹亭（即ち通禱の家）の庭にある築山を指すのであろう。そこに出ていくのを「遊（遊ぶⅡでかける）」というのも大仰な表現であるが、そこは狂詩のおかしみである。

狂詩というものは和習（和臭）が極めて濃厚なものであり、中国人には理解することが難しい。和語で読む場合が多いので、漢詩文の素養のある日本人でさえ、意味を取りかねる部分がある。通禱は日本人の誰がみても解るように、ルビを多く振っている。

●○○●●●○○

竹亭連日客來繁

竹亭 連日 客來ること繁し

（この竹亭には、毎日お客はながぎょうさ
ん来はりますのんや）

●●●○○●●●

見把五分酒又喰

見把五分 酒又た喰

（うちでは五分屋のようにお酒でも料理でもよりどりです）

●○○●●●○○

野郎眺拳唾三尺

野郎 拳を眺めて 唾三尺

（若いお人は拳遊びに熱中、見てはる方も
順番を待つて涎を垂らしてはります）

●○○●●●○○

拳飲未減唾長痕

拳飲んで未だ減えず 唾長痕

（面白おすなあ、拳遊びが終わっても、まだ涎のあとが残ってはります）

通禱は軒号が「古帆軒（コハンヤ）」であったので、亭号の「竹亭」にルビを振って「コフンヤ」。第二句にある「五分」、即ち五分屋（注2）に掛けて、わざわざ竹亭を「コフンヤ（＝ゴフンヤ）」とルビを施したわけである。第二句の「見把」は「選り取り見把り」の意。後半二句は拳遊びの情景。第三句の「拳」は本来「拳」とあるべきだが、平仄の関係で仄字の「拳」を用いた。当時、酒席で盛んに行われた拳遊びは、拳を振り「拳」げるので「拳」の字で代用したのだろう。負けると罰杯をくらうが、酒が飲みたくて、わざと負ける者もいたらしい。あてがい扶持の酒では物足りず、罰杯をねらって拳遊びに加わりうとウズウズしている男たち。「拳を眺めて唾三尺」とは、そんな連中を描写したものだ。拳飲んで「飲」は、本来「飲」（おさむⅡかたづけの意）の字を用いる

べきだが、古来よりこの二字は混用された。

この詩は二四不同、二六対の規則は守られてはいるが、粘法や反法は守られていない。また第二句は四字目が孤平となっている。ただ前述のように、破格であっても狂詩では許容される。

通禮は村上源氏久我流の羽林家の家格の公家に生れたが、家紋が笹竜胆であり、それに因んで「竹亭」と号したものと推測される。では「古帆軒」の命名の由来はなんであろうか。それを解くカギがこの狂詩に隠されているように思えてならない。この「古帆軒」という軒号であるが、筆者はこの短冊に出くわすまで、コハンケンと読むものだと思い込んでいた。号の読みは音訓両用の例もあるのも、もちろんコハンケンと読むことがあったかもしれないが、普通はコハンヤと読んでいたのであろう（注3）。

「竹亭」のルビに「コフンヤ」とある。我が家・古帆軒「コハンヤ」は毎日「コフンヤ（≡ゴフンヤ・五分屋）」の様子を呈しているもので、ここでは洒落て「ハ」を「フ」に改め、「コフンヤ」としたのではないか。―我が家「竹亭」では連日のように客が来て、大飯を喰らい、大酒を飲んでい。その様子と言ったら、煮売酒屋の「五分屋」での宴会のようである―ということを表現したかったのであろう。

ところで、このコハンヤは、江戸時代から明治初期にかけて使われた外来語のコンハンヤ（コンパンヤ）を想起させる。齋藤毅『明治のことは 文明開化と日本語』（講談社学術文庫、二〇〇五年）の第七章の「会社―「催合」商売」において同氏が引用している『紅毛訳問答』に、「コンハンヤとは国王の事に候哉」という江戸の

医官の間に対して、「コンハンヤと申は諸国通商の貨物を売買座の事にて、国王の事にては無之候」と和蘭カピタンが答えているのが見える。『大槻磔水蘭説弁惑』に、「こんばんや」といふは「こんばんぎい」と云ふ様な事なり」とあるのに関連して、齋藤氏は「こんばんや」について、「蘭語の *compagnie* を誤ったものではなく、むしろポルトガル語で会社とか随伴者を意味する *companhia* から出たとみるのが正しいであろう」とする。

同書では、江戸時代から明治初年にかけては、「会社」というもの内容については、必ずしも十分な理解がないままに、それを示す外来語がそのまま使われた例が多かったとする。また、中国での訳語である「公司」に「ナカマ」という振り仮名をふった例が示されている。更に、明治十一年に書かれた岩倉具視『特命全權大使訪欧回覧実記』の中に「歐洲ノ政治ハ、細ニ分析スルニ、大ハ一國ノ政治ヨリ、州ト分レ、県ト分レ、郡ト分レテ、小ハ村邑ノ分割ニ帰スルマテ、尽ク会社ノ性質ニテ結晶ス」とあり、この「会社」について、齋藤氏は「むろん今日の営利会社ではなく、それを含む人々と自然のすべての人間集合体を意味していたと思われる」と分析している。

通禮がこの「コンハンヤ」に擬えて「古帆軒（コハンヤ）」と号した仮定するならば、「コンハンヤ」をどのような意味と考えて号したのであろうか（注4）。前引の『紅毛訳問答』に「コンハンヤと申は諸国通商の貨物を売買座の事」とあったが、江戸時代には諸国通商では帆船が欠かせなかった。よって「古くからの帆船による諸国の人々との通商の場である軒（いえ）」の意で、古帆軒とした

のかもしれない。明治初期は帆船から蒸気船への移行時期であり、帆船はすでに「古」いものとなっていたので「古」を冠したのである。また、「古」の字には、通禮の、自らが既に旧派の人間となつてしまった、という自嘲も込められているかもしれない。

さて、ここでの通商は「物品の交換や売買」というよりも、「人的交流を通じての情報や学問の交換」を意味している可能性もある。『交易』の語も明治時代には「学問を交易して智識を開き」（中村正直『西国立志編』）という用例があるように、互いに交換するという意味で使われている。『明治のことは 文明開化と日本語』に見られるように、「コンハンヤ（会社）」が「ナカマ」や「人間集合体」として考えられていた事実があるので、「仲間が集まって楽しむ場所」という軽い意味である可能性も考えられよう。とまれ、人的交流の場であつた古帆軒・竹亭は、往々にして交流を促進する宴席と化していたのであろう。

通禮は図2の短冊で、「竹亭」に「コフンヤ」とルビを振つていた。単に「五分屋」のような我が家だから「コフンヤ」とルビを振つただけではあるまい。やはり「コンハンヤ (company・会社)」↓「コハンヤ (古帆軒) 〓 竹亭」≡「コフンヤ (五分屋)」という連関を考えることによってこそ、「竹亭」に「コフンヤ」とルビを振つた意味が自ずと明確になるであらう。

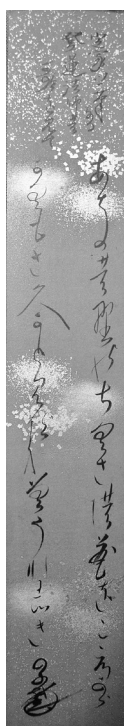
四、猪熊信男の短冊―これは袋物商の紹介・宣伝文句か？

猪熊信男（一八八二～一九六三）、香川の人。宮内庁図書寮御用

掛・有職家。国学者猪熊夏樹の養子。その文庫を恩頼堂文庫という。宸翰研究家で蒐集家でもあつた。

猪熊の狂詩短冊を掲出する前に、猪熊の和歌短冊（図4）を一葉、参考として挙げる。

図4 猪熊信男和歌短冊「定家卿筆なる・・・」



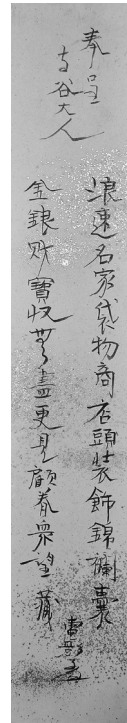
「定家卿筆なる／登蓮法師の／歌を見て」と題して、

あきの野のちくさの花をこゝろから／かくもさくかと思ふそ
れしき のふを（花押）

秋の野に咲く千草の花を詠じた作品。短冊裏の左下には猪熊の筆で「宮内省図書寮御用掛 猪熊信男（花押）」と書かれている。またこの短冊には、「拙筆 むのくま生（花押）」と墨書された畳紙が巻かれている。

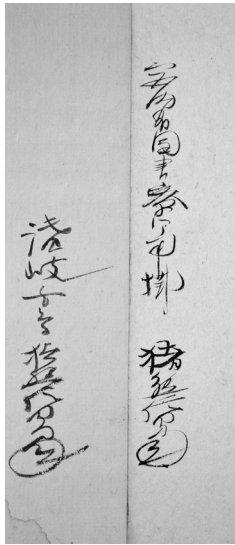
さて、猪熊が認めた狂詩短冊（図5）である。前の和歌短冊とは書体が異なり、同一人物とは思えない風情が漂う。隸意の強い、かなり個性的な楷書である。

図5 猪熊信男狂詩短冊「奉呈 寺谷大人」



「奉呈／寺谷大人」と題し、「浪速名家袋物商店頭装飾錦欄囊／金銀財宝収無尽更見顧眷衆望藏」と狂詩を書して、「電影子（花押）」と署名がある。短冊裏右下には自筆で「讃岐白鳥 猪熊信男（花押）」とある。これらの署名・花押が無ければ猪熊の作とは俄かに了解できないであろう。因みに、図4と図5の短冊裏の署名を並べたもの（図6）を掲げる。紛れもなく同一人によるものである。

図6 図4と図5の短冊裏左下にある署名（右が図4、左が図5の裏書）



署名の書風から見て若いころのものとは思えない。とするならば、昭和になってからの狂詩となる。狂詩が一般にほとんど作られなくなった時代の作品として、極めて珍しい作例の一つとなろう。

●●○○●●◎
浪速名家袋物商

浪速の名家 袋物商

（大阪で名高い袋物商の寺谷の且さんの店）

●○○●●○○◎
店頭装飾錦欄囊

店頭装飾す 錦欄の囊

（その店中には錦欄で作ったごつつええ袋物がおますわ）

○○○●○○●●
金銀財宝収無尽

金銀財宝 収めて尽くること無し

（寺谷はん、めっちゃ商売上手で、そりゃ金銀財宝しこたま貯めこんでまっせ）

●●●●●◎
更見顧眷衆望藏

更に顧眷せられて衆望を蔵めり

（それだけやおまへん、お客さんから可愛がられ慕われてますわ。そやさかい、ぎょうさん買うておくれやつしや）

「錦欄の囊」や「金銀財宝」の語があることから、意図的に金銀の砂子が撒かれた短冊を用いたのであろう。この短冊や前述の通禱の短冊のように、詩を一行に二句ずつ計二行（四句）書いて、その二行のちょうど真中の下部に署名する様式は、室町時代にすでに見えるものである。

韻律について見ると、第一句から第三句までは二四不同・二六対が守られ、第一句も四字目の孤平が避けられており、近体詩の規則

に法っている。ところが第四句に至って第一字から第六字まで全て仄字となり、全く破格になってしまった。狂詩であるから、もちろん平仄に拘らなくても問題はないのだが、第一句から第三句までが整然と規則に準じているので、やや違和感がある。もしかすると、猪熊は「眷」（上声）の字を平字と思い違えたのであろうか。ただし四字目の「眷」が仮に平字であつても、三字目と五字目が仄字なので、孤平となつてしまうのだが。

この作品を狂詩に分類することには異論もあろう。だが、「袋物商」という和語や「金銀財宝」という通俗的な熟語が使われていること、寺谷氏の経営する袋物店を面白可笑しく宣伝しているような内容から、狂詩とするのが穏当であろうと筆者は考える。狂詩の雰囲気を出そうと、試みに大阪弁で訳してみたが、もとより作者の猪熊は関西人ではない。ただ、この短冊を恵与された寺谷なる袋物屋の主人はおそらく関西出身であろうから、この短冊を周囲の人に自慢するのに、書いてある内容をこんな風に講釈したのではないかと想像したまでである。更に想像を逞しくするならば、この短冊を店頭に掲げて宣伝に用いていたかもしれない。

このような文学作品を書いた短冊を奉呈するということが、戦前には世間でごく普通に行われていたことを、この作品は伝えている。学者・猪熊信男と袋物商との狂詩による交流は興味深いものである。猪熊がこの袋物商における上客であつたのか、それとも他の繋がりがあつたのかは不明である。

五、おわりに

本稿では狂詩短冊を二葉取り上げて分析を試みた。特に東久世通禧の短冊はルビが多く振られており、他に類例を見ない独特なものであつた。狂詩という特殊な形式を短冊に認めるむずかしさがあらわれている。狂詩という形式自体が長い年月にわたつて一般的であつたわけではないので、狂詩短冊が少ないとも言えよう。しかし、漢字だけを書いて他の人に読んでもらうことや内容を理解してもらうことに、やや無理のある場合があることが、狂詩を短冊という長い料紙に書くことの極めて少なかった理由の第一なのではあるまいか。だからこそ、こう読んでくれと通禧はルビを細かく振つたのであろう。

猪熊信男の短冊は、狂詩が殆ど詠まれなくなった昭和の遺作として貴重である。知人の袋物商を褒め上げ、店の宣伝に寄与するような内容であることも注目される。文学のみならず短冊という形式が、世間において交流の手段となつていた戦前の様態を今に伝えるものでもあろう。

さて筆者は、『短冊学』研究序説―漢詩短冊の研究意義を論ず―（『植木久行教授退休記念 中国詩文論叢 第三十三集』（中国詩文研究会、二〇一四年）において、自筆原典としての短冊には、別集とは異なる本文情報を含むものとして、また別集に見えない作品を伝えるものとしての存在・研究意義があること、さらに自筆資料・歴史資料としての存在・研究意義があることを述べた。

今回の短冊も、二人の筆者には別集が存在しないので、短冊に書かれた作品自体に、存在意義と研究意義があることは言うまでもない。さらに、通禱の短冊ではその軒号の由来をも示唆する内容が含まれていたことは、特筆大書すべきものと思われる。短冊は薄くて小さい料紙のため、粗略に扱われることが多いのであるが、今一度、我々の祖先が日常に親しみ、そして自らの思いを筆に託して遺した短冊文化を深く顧みる必要があると考えている。

(注1) 因みに他の二葉は、冷泉為恭筆の画賛短冊「喰芋放屁」の語が見える狂詩賛」と無名作者による淡彩画賛短冊（御陰に見立てた二股大根と陽物に見立てた蛙の画に狂詩賛）。いずれも排泄や艶笑に関わる題材である。

(注2) この「五分」が煮売酒屋の「五分屋」を指していることについては、名古屋大学の塩村耕教授より教示を得た。

(注3) 雅号や軒号では、音読みと訓読みの二通りある場合がある。例えば井伊直弼の号「宗観」、これはソウカンと詠んで茶名であるが、「無根水（ムコンスイ／むねみ）」の別号もあるので、「宗観」は「むねみ」とも読める。

(注4) 通禱は、当時の知識人がそうであったように、西欧の歴史や事物にも多大の関心があった。「拿破崙（ナポレオン）」と題して、ナポレオンが追放され、さらにそこから脱出した「ゑるはの嶋」（エルバ島）を詠じた詠史和歌も残っている。

拿破崙 たちかへるゑるはの嶋のなみの音は いかにはけしく世にひ、きけむ

〔二〇一六・九・二九 受理〕

コントリビュータ…萩 信雄 教授（書道学科）